愚者とオルゴール

かーばんくる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愚者とオルゴール

【Ｎコード】
Ｎ９６８２Ｚ

【作者名】
かーばんくる

【あらすじ】
懐かしく美しい、それでいてどこか哀しいオルゴールの音色を聞いた事からすべてが始まった。
オルゴールの音色に引かれていった先にいた少女
徐々に明かされていく少女の秘密、そして自分自身にかかわる秘密
衝動的に書き始めた作品ですがどうか読んでやってください。

序章（前書き）

はじめまして（＞０＜）

唐突に書き始めた作品ですがよろしくお願いします（　）

序章

オルゴールの音が聴こえる。とても優しく、懐かしくそれでいてどこか哀しい音色だ。
和哉は音の元を探してフラフラと歩き出していた。

寂れた公園、オルゴールの音色はそこからしていた。
さび付いた遊具、まるで人々から忘れ去られたように錆付いた遊具に夕暮れの茜色の社用が差し込む。
公園の中央にその少女は立っていた、全身を白のワンピースでつつんだその少女は胸に小さな木箱を抱えていた。

このオルゴールの音、あの箱からしている。

「そのオルゴール、綺麗な音だね」
和哉は思わずその少女に声を掛けていた、少女はそうでもしないと消えてしまいそうなほど、儚げでさびしそうに見えたからだ。
和哉の言葉にまったく反応を示さない少女。
「ねぇ、君……」
この子、聴こえていないのかな。
そんな反応に不安を感じ、和哉は少女へと歩み寄る。
少女の目の前まで歩いた時、突如、顔を伏せていた少女が顔を上げた。
「あ、やっと顔を上げてくれた」
喜ぶ和哉をよそに少女は小さく、一言だけ和也に告げる。
「あなたの……あなたの家族が、今日死ぬ」
何を……言って。
「何を……」
そこまで言いかけた時、一陣の風が凪いだ。

序章（後書き）

いかがでしたか？

感想などをいただけるととてもありがたいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9682z/

愚者とオルゴール

2011年12月30日03時51分発行